



No.22 2019.11.6

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

コミュニティ・スクール先進県 山口県に学ぶ No.1

明石のコミュニティ・スクールにいろいろとアドバイスをいただいている兵庫教育大の小西先生は、山口県のコミュニティ・スクールの基礎を創られた方です。その小西先生が「奇跡の学校」(風間書房)という山口県のコミュニティ・スクールの取組を綴った本をこのたび出版されました。山口県のコミュニティ・スクールがギュッとこの1冊にまとまっています。ではどうして山口県でコミュニティ・スクールが浸透していったのか?コミュニティ・スクールが導入される中での変化は?…。知りたいことは一杯あります。ちょっと山口県のコミュニティ・スクールを覗いていきたいと思えます。



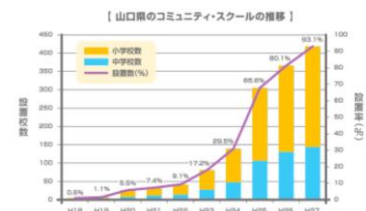
日本一を目指す取組!! 「地域教育力日本一」取組の推進

山口県のホームページをのぞいてみると知事のガッツポーズとともに日本一を目指す取組!!「地域教育力日本一」取組の推進というフレーズが目飛び込んできました。現在山口県の小・中学校における「コミュニティ・スクール」の設置率は93.1%で全国1位だそうです。

また山口県独自の取組である「地域協育ネット」(地域協育ネットとは概ね中学校区をひとまとまりとして、幼児期から中学校卒業程度までの子どもの育ちや学びを地域ぐるみで見守り、支援する仕組み)は100%の設置率だそうです。

明石市でも幼少中の学びと育ちをつないでいくために中学校区で教職員をつなぐ校区UNITという仕組みがあります。小・中学校でコミュニティ・スクールが立ち上がる中で校区UNIT協議会(?)といった形で中学校区でのコミュニティ・スクールのつながりとして発展するのかなと考えたりします。

参照) 山口県ホームページ



山口県の「コミュニティ・スクール」の設置率が高いのはなぜ?

山口県といえば松下村塾が頭に浮かんできますが、幕末維新期、寺子屋の数は全国2位であったことなど、もともと“地域全体で子どもを育てる”という教育風土があったとの説明もありますが、何よりも現代的な教育課題の解決(後述)に地域連携を基本として学校が動き始めたことにあると思われれます。

明石市には、コミュニティ・センターが約50年前に導入され、現在全小学校区にコミュニティ・センターが設置され、各小学校区の地域づくりの拠点として、中学校区のコミュニティ・センターでは地域のサークル活動の拠点として大きな役割を果たしています。そうした仕組みを活かしつないでいくことにより明石市でも地域を支え、社会を創り、豊かに生きる力を育てる中で学校を核にしたまちづくりを進める明石版コミュニティ・スクールが浸透していく可能性があると思っています。

ではどんなことを?

では山口県の「コミュニティ・スクール」ではどんなことをしているのでしょうか。地域の有志の方が講師になっての放課後や土曜日等に行う学習支援活動や、環境整備など、学校の教育活動を支援する活動や、学校や子どもたちによる地域貢献等各校区で様々な取組が生まれているそうです。

そうした山口県の取組には、明石市でコミュニティ・スクールの取組を進めるにあたってのアプローチのヒントがあるように思います。明石でもモデル校として一足先にスタートした松が丘小では「大人も楽しむ学習広場」をスタートしたり、二見北小ではコミュニティルームを設けるなど、人が集まる仕組みづくりを模索されています。また朝霧小ではコミュニティ・スクールだよりを発行し地域・保護者のみなさんに朝霧小のコミュニティ・スクールの取組を広報するなど学校やコミュニティ・スクールに関心をもってもらう取組を始められています。学校として、まず一歩を踏み出してみることが必要なのではと思っています。いずれにしても、まず学校に関心を持ってもらい、学校に人が集まる仕組みづくりから始まるのかなと思います。

コミュニティ・スクールへと舵をきったきっかけは？

平成 20 年度の全国学力・学習状況調査の結果（平成 20 年度学力ショック）が大きな転換点となったようです。『学校の課題』として学力の未定着、学力の二極化、市町間・学校間における学力の格差、学習意欲の低下、児童生徒の社会性の欠如、教職員の取組格差といったこれまで各学校に任せにしていたことが、学力の定着状況や学習状況等に関する山口県の課題として浮き彫りになってきようです。こうした課題に加え中学校の荒れの繰り返し、小学校における学級王国（学力の学級間格差）もあり、こうした課題を解決していくためには、学校だけでは限界であり、学校を社会に開く必要性からコミュニティ・スクールに舵を切ったのだと思います。教師が変わっても、校長が変わっても地域に根付いた持続可能なカリキュラムが現在山口県では根付き始めているのだと思います。

山口県の課題は本市にも当てはまります。よりよい学校教育のために、毎年市内では、各校ごとに、また市や県主催で教師力向上や授業力向上に向けての研修・研究が行われています。これは何十年も繰り返し、積み上げられてきましたが、手段が目的化してしまっているところやこれまでの考え方・やり方では対応できない限界にきているのではと思います。文科省も新学習指導要領で“よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」を実現”と謳っているのも、社会全体で子どもを育てる必要性から「社会に開く」を強くアピールしているのだと思います。本市もコミュニティ・スクールの導入に舵をきりました。なんちゃってコミュニティ・スクールではなく、まちを支え、社会を創る子どもたちが育つコミュニティ・スクールづくりに向かっていきたいですね。

次号では山口県のコミュニティ・スクールの様子をみていきたいと思います。

杉並区平成 31 年度教育調査報告書 学びの構造転換「元年」

11 月に入って杉並区の平成 31 年度教育調査報告書が発表されました。学力調査の考察からこれからの杉並区の歩む方向性を示したのですが、その中身の濃さに圧倒され読み切れていませんが、はじめに、各章のまとめ、編集後記、資料を読む限り興味深い内容です。（検索：杉並区 平成 31 年度報告書）

表紙には“全ての子どもに 人生と社会の基盤となる学力を育む 共同探究者のために 個別に選ぶ、探求に浸る、協同して共に生きる学びの構造転換へ 同じも違いも混ざり合いを認め合い、委ねて支えて共に探究する”と意味深なことが書かれています。

はじめにでは、学びの構造転換「元年」に寄せてという見出しから始まります。そしてその中に哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの言葉をかりた次のような一説があります。

「難問は根元から引き抜かなければならない。表層を刈るだけでは難問のままにとどまる、ゆえに全く新しい方法でそれを考え始める必要がある。」

では、教育課題を難問化＝複雑で多様にしている根は何でしょうか。・・・難問を根元から引き抜くために本格始動した施策こそが「学びの構造改革」です。



といったことが書かれてあります。そして「学びの構造改革」の要点の第一は学びの<個別>化だと続いています。今までの「同じ内容を、同じペースで、同じ方法で学ぶ」といった一斉学習を基本とした授業改善が限界を迎えているということはよく耳にするようになりました。それはうすうす現場の先生方も肌で感じていることではないかなと思います。しかし、非難を覚悟で言えば、現在も「同じ内容を、同じペースで、同じ方法で学ぶ」といった一斉学習を基本とした授業研究を無限ループのように繰り返しているのが現状ではないでしょうか。現状を見つめ、地域・保護者の知恵をかりながら今後の学びのあり方を考えていくのが、学校側からのコミュニティ・スクールへのアプローチではと思います。授業から学びの仕組みをデザインする研究にシフトする時期がきているのではと思います、そんなことを考えているとネットショップから本の紹介のメールが届きました。



「人生 100 年時代を生き抜く子育てる！個別最適化の教育」読んでみる価値はありそうです。

（文責：北本）